慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アレッサンドロ・ファルネーゼ下の低地諸国
Sub Title	
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.27 (2012.) ,p.95- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20120530-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アレッサンドロ・ファルネーゼ下の低地諸国

前　田　伸　人

序章：始めに

1．問題の所在

この論考では，イタリア出身の武将で外交にも優れたアレッサンドロ・ファルネーゼ（1545-92年）に焦点を当てながら，16世紀のスペインならびに欧州の歴史に照らしつつ，彼によるスペイン領低地諸国の統治の推移と意味を考察していくのが目的である。

ところで，アレッサンドロ・ファルネーゼというと別の人物を想起する人もいる筈だ。枢機卿を経て教皇パウロ三世になったアレッサンドロ（1468-1549年，教皇は1534年から）は，芸術を保護しローマにファルネーゼ宮を建設させた。また，枢機卿で芸術の保護者アレッサンドロ（1520-89年，枢機卿は1534年から）もいる。本稿が扱う第三代パルマ・ピアチェンツァ公アレッサンドロから見れば，二人は各々曽祖父，祖父に当たる。

何れの人物にしろ共通なのは，常人に比べ精力的であることだ。しかし，芸術保護者である二人の先人以上に，本稿のアレッサンドロは，時代をより濃密に反映しているかもしれない。人質として赴いて以来スペインで活躍した個人の内に，西仏の角逐の場だったイタリアの歴史，スペイン帝国全体の歴史，その矛盾が爆発する低地諸国の歴史等，時代の構造を重層的に映している。これこそが本稿のアレッサンドロを取挙げる理由である。

2．研究史

ファルネーゼ伝で有名なのは，レオン・ファン・デル・エッセン『アレクサンドル・ファルネーズ』全五巻（ブリュッセル，1933-37年）[1]である。独立百年を迎えたベルギーの自国史編纂事業の一環と言えよう。近年の作にはフアン・カルロス・デ・ロサーダ『フランドルの将軍たち：アレハンドロ・ファルネーゼとアンブロシオ・デ・スピノラ』（マドリード，2007年）[2]がある。硬軟を取り混ぜた策略家ファルネーゼと対照的な人物アルバ公を描いた著作には，ヘンリー・ケイメン『大アルバ公：スペイン帝国の戦士』（マドリード，2004年）[3]がある。その彼が作った兵站路，所謂スペイン道を扱った研究書がジョフリー・パーカー『フランドル軍とスペイン道，1567-1659年』（マドリード，1972年）[4]だ。

スペイン王フェリペ二世在位時の欧州を総覧したものにJ.H.エリオット『分裂したヨーロッパ，1559-1598年』（グラスゴー，1976年）[5]がある。2000年の改訂版も基本的な叙述に変化はない。

スペイン帝国における低地諸国の制度の考察にはケーニヒスベルガーによる『王政，全国会議と議会：15・16世紀における低地諸国』（ケンブリッジ，2007年）[6]がある。これに関連して，オランダの独立をヨーロッパ全体の枠組みの中で考察した論文集が，ジョフリー・パーカーによる『スペインと低地諸国，1559-1659年』（グラスゴー，1979年）[7]，同『オランダの反乱』（ロンドン，1977年）[8]である。また，同帝国内のイタリア領を

---

(1) Léon Van Der Essen, *Alexandre Farnèse*, 5 vols. (Brussel, 1933-37).
(2) Juan Carlos de Losada, *Los Generales de Flandes* (Madrid, 2007).
(3) Henry Kamen, *El Gran Duque de Alba* (Madrid, 2004).
(4) Geoffrey Parker, *The Army of Flanders and the Spanish Road* (Cambridge, 1972).
(5) J.H.Elliot, *Europe divided 1559-1598* (Glasgow, 1976).
(6) H.G.Koenigisberger, *Monarchies, States Generals and Parliaments* (Cambridge, 2007).
(7) Geoffrey Parker, *Spain and the Netherlands* (Glasgow, 1979).
(8) Geoffrey Parker, *Dutch Revolt* (London, 1977).

論じたのは，且つてベネデット・クローチェだったが，今では論者も多い。トーマス・ジェイムズ・ダンデレット；ジョン・マリアノ（編）『イタリアにおけるスペイン：1500-1700年における政治，社会並びに宗教』（ライデン，2007年）[9]が参考になる。ジュゼッペ・ガラッソ『帝国の辺境で：スペイン帝国とナポリ王国』（バルセロナ，2000年）[10]が一例だ。

低地諸国戦に参加した人士の記録としては，1588年から99年の従軍記録を残したカルロス・コロマによる『低地諸国の戦争』（アントワープ，1625年）[11]，ユグノー包囲下のパリに籠城し，ファルネーゼに救出されたベルナルディーノ・メンドーサによる『1567年から1577年までの低地諸国における戦争で生じた事件に関する解説』（マドリード，1592年）[12]，1572年から92年までを記録したアロンソ・バスケスによる『アレハンドロ・ファルネーゼ総督時代におけるフランドルとフランスにおける諸事件』（ファドゥーツ，1966（1879）年）[13]がある。他にもオランダの歴史家ヨハン・ブラウウェルがスペイン語史料を編集した『八十年戦争初期のスペイン軍兵士による記録』（ジュトフェン，1980（1933）年）[14]がある。

3．章立て

第一章は，スペイン帝国に組み込まれたイタリア領を総覧する。特にファルネーゼの生まれたパルマを巡る状況に留意する。第二章は，同帝国内

---

(9) Thomas James Dandelet and John Mariano (eds.), *Spain in Italy* (Leiden, 2007).

(10) Giuseppe Galasso, *En la Periferia Imperial* (Barcelona, 2000).

(11) Carlos Coloma, “Las Guerras de los Estados-Bajos”, in *B.A.E.* vol. 28 (Madrid, 1948).

(12) Bernardino Mendoza, “Comentarios de lo sucedido en las Guerras de los Países-Bajos”, in *B.A.E.* vol. 28 (Madrid, 1948).

(13) Alonzo Vázuquez, “Los Sucesos de Flandes y Francia del tiempo de Alejandro Farnese, in *Colección de Documentos Inéditos para la Historia de España*, vol. 72-74 (Vaduz, 1966).

(14) J.Brouwer, *Kronieken van Spaansche Soldaten* (Zutfen, 1933).

にある低地諸国（現ベネルクス三国に相当）を扱い，ファルネーゼが登場するまでの同地域における統治と問題の発生を粗描する。第三章は，オラニェ公優位下，カトリック勢力の劣勢を巻き返して，ファルネーゼが低地諸国南部の支配をどう回復したか，その推移を見る。この時期はファルネーゼの絶頂期とも言える。第四章では，やむを得ず実施したフランス出兵とそれが低地諸国にもたらした影響を，ファルネーゼ死後も含め描く。

第一章：スペイン帝国内のイタリア半島

１．総論

トラスタマラ朝時代から，スペインは南イタリアを地中海方面進出の足がかりとしていたが，ハプスブルク朝との縁組で低地諸国との紐帯が強くなると，欧州大陸を南北に縦断するルートを確保すべくイタリア北部にも関心を示し，従来以上にフランスと烈しく対立する。フランスを破り，この半島部を帝国内の安定的な邦土にしたのである。

２．両シチリア王国

南イタリアの島嶼部シチリアは，中世以来スペイン･フランス支配が交替したが，1282年シチリア晩鐘事件を契機に，スペイン・アラゴン王国のペドロ三世が同地域を獲得した。破門宣言をものともせずフランスや教皇庁と争った成果である。一方，半島部のナポリ周辺には，フランス系のダンジュー朝があったが，1442年アラゴン王国アルフォンソ五世はレナートを逐ってナポリを掌握し，アルフォンソ一世を称した。こうして両シチリア方面にスペイン系の王朝が成立した。翌年，アルフォンソはアラゴンの首都をナポリに遷した。商人層と貴族の抗争が先鋭化して王権が弱体化した本国とは対照的に，ナポリでは文芸が栄え，文人ロレンツォ・ヴァッラ等を庇護した。

しかし，フランスは1501年ナポリに再度侵入してアラゴン王家を追放し，1504年まで両シチリア王国を支配した。だが，アラゴンも“大将軍”ゴン

サロ・コルドバを起用してフランス軍を逐い，奪還した。以後，中断を挟んでイタリア統一までスペイン系の支配が続く。

スペイン支配の確立でスペイン人の流入も増えた。その一人がバレンシア地方ボルハ出身のロドリーゴ・デ・ボルハ，ロドリーゴ・ボルジアのイタリア名で有名だ。彼は社会的上昇を果たし，1492年教皇アレクサンドル六世（1492-1503年）となった。娘にルクレツィア，息子にチェーザレがいる。後者は，ナヴァール王の妹と結婚してヴァレンティーノ領を得てヴァレンティーノ公と呼ばれた。

3．ミラノ公国

ミラノ公領はヴィスコンティ家の支配下にあり，ジョヴァンニ・ヴィスコンティは子供に遺産を分割相続した。ピアチェンツァ，パルマ領もその一つである。1450年ミラノ公の男系が絶え，娘婿のフランチェスコ・スフォルツァによりスフォルツァ家支配が始まる。有名なのがルドヴィーコ・スフォルツァで，肌が褐色ゆえ“イル・モーロ”の綽名で呼ばれた。イル・モーロは簒奪者の意識が抜けなかったため，ヴィスコンティ家に男系の継承者が絶えた際，公国がフランスに奪われるのを恐れる余り，フランスの目をナポリ王国に逸らそうとした。フランス王シャルル八世は1494年ナポリに侵入したが，ルイ十二世はついに98年ミラノ公国に侵攻し，イル・モーロを捕え，その死まで幽閉した。こうしてフランスの支配が行なわれ，1499年から1512年まではルイ十二世がミラノ公を兼任，1515年から21年まではフランソワ一世がミラノ公を称した。その後スフォルツァ家支配が復活し，22年から26年はフランチェスコ・スフォルツァが治めた。

だが，スペイン王カルロス一世が1525年パヴィーアの戦いでフランソワ１世を破って捕虜にした結果，ミラノ公領が実質的にスペイン支配下に入った。翌年のマドリード条約で同公国はルドヴィーコ・イル・モーロの第二子フランチェスコ・マリア・スフォルツァの領地となったが，35年同人の死亡でスペインの総督支配が名実ともに確立した。

スペインと関係する人物に言及しておく。イル・モーロの姉妹ビアンカ・マリア・スフォルツァが神聖ローマ皇帝マキシミリン一世に嫁いで，ハプスブルクとの関係が始まった。1499年フランスが侵入した際，公国はこの縁を頼りにハプスブルク宮廷のあるインスブルックに，息子エルコーレ・マッシミリアーノとフランチェスコを送って救援を求めた。ルドヴィーコが敗北して捕虜になったので，二人は彼女が死ぬ1510年まで伯母の庇護を受けた。その後は低地諸国を治めるマルガリータ・デ・アウストリアが二人を保護した[15]。他にも文人・軍人などが保護を受けている。その一人，人文学者ルイジ・マリアニはミラノ公主の典医を経て，ハプスブルク家のマキシミリアン一世，フェリペ一世，カルロス一世から相談役を任された。彼はまた，ヘラクレスの柱に刻まれた格言（Plus ultra 又は Plus oultre）で有名なカルロス一世の紋章を1516年ブリュッセルで製作した。その功績でガリシア地方トゥイの司教となった[16]。また，バルダッサーレ・カスティリオーネはウルビーノ宮廷をモデルにした『宮廷人』を著し，1496年から1500年までミラノ公国に仕え，のちスペイン宮廷入りしてアビラ司教となり，1530年トレドで死去した。ピエトロ・マルティーレ・ダンギエラは，教皇使節として1487年スペインに赴いてカトリック両王に仕えた。コロンブス隊に聞き取り調査を行なっている[17]。

4．パルマ公国とファルネーゼ家

ボルセナ湖地方を根拠地にしていたファルネーゼ家がローマの貴族界入りしたのは，ピエル・ルイジ・ファルネーゼがジョヴァンナ・カエターニと縁組したことに始まる。二人の間に生まれたのが，後の教皇パウロ三世，アレッサンドロ・ファルネーゼだった。アレッサンドロは，妹ジュリアが教皇の愛人だったおかげで，ボルジア家出身の教皇アレクサンドル六世に

---

(15) Dandelet and Mariano (eds.), *op.cit.*, p. 100.
(16) *Ibid*. p. 101.
(17) *Ibid*., p. 102.

抜擢されて出世した。パルマ司教を皮切りに，1493年には枢機卿に任命された。聖職者ながらピエル・ルイジ，パオロ，コンスタンツァという三人の子供をもうけたが，教皇ユリウス三世により何れも嫡出子として認められた。内部の政争に勝ち，賄賂を配った甲斐あって，アレッサンドロは教皇パウロ三世に選出された[18]。彼はまた，芸術家の保護者として，サン・ピエトロ寺院の天井画やシスティーナ礼拝堂の“最後の審判”の製作をミケランジェロに委せた。イタリア貴族の例に漏れず，一族の利益拡大に奔走したのだった。

さて，スペイン王カルロス一世は，フランドル人女性との間に非嫡出子をもうけた。一人はドン・フアン・デ・アウストリアで，今一人がヨハンナ・ファン・ヘインストから生まれたマルガリータだ。カルロスはこの娘を，イタリアの有力者と政略結婚させ，スペインとイタリアとの紐帯を強化した。マルガリータは，七歳でフィレンツェ公国のアレッサンドロ・デ・メディチ（教皇クレメンス七世の甥）と縁組したが，夫はその従兄弟に殺害された[19]。なお，この事件はマルグリット『ヘプタメロン』の一挿話にもなっている。今度はオッタヴィオ・ファルネーゼと縁組し，これにファルネーゼ家のパウロ三世が承諾したため，両家の関係が築かれた。かくて1538年結婚式が行われたが，オッタヴィオは，二歳年下である上に精神的にも肉体的にもひ弱だったので，妻から相手にされなかった。見かねた父王は，オッタヴィオを従軍させて鍛錬した。帰還後，1547年オッタヴィオは妻との間に双子をもうけた[20]。その一人が本稿で扱うアレッサンドロ・ファルネーゼに他ならない。今一人の子カルロは早世したので，アレッサンドロがファルネーゼ家唯一の後継となる。

教皇パウロ三世は，スペインとの紐帯を築くと，一家の所領拡大に布石を打った。先ず，カルロス王にミラノ公領の割譲を求めたものの拒絶され

---

⑱ Losada, *op.cit.*, pp. 51-52.

⑲ *Ibid.*, p. 52.

⑳ *Ibid.*, p. 53.

た。それにも懲りず教皇領の一部を割譲して，1545年息子のピエル・ルイジをパルマ・ピアチェンツァ公に任命し，その後公領はその息子で先述のオッタヴィオに譲渡されたが，これがスペインとの関係を悪化させた。こうした中，ピエル・ルイジは，親スペイン派のジェノヴァ共和国の有力者ドリア家と対立し，ピアチェンツァ城内で殺された。これを見てパルマを占領すべくスペイン軍が出兵した。オッタヴィオは殺された父親の恨みを漱ぐべくパルマに籠城した[21]。しかし，彼の祖父教皇パウロ三世はスペインとの関係悪化を恐れ，パルマ公領を教皇領に戻した。パウロの死後教皇に立ったユリウス三世は，圧力に屈して公領をカルロスに譲渡した。この処置にオッタヴィオは憤り，親スペイン姿勢を転換してフランス王アンリ二世に助力を求めた。カルロスはパルマに侵攻したが，スペインとフランスが講和して包囲を解き，ファルネーゼ家はパルマ領を維持した[22]。

カルロスが退位するとフェリペ二世がスペイン王を継いだ。ちょうど教皇庁には，反スペインで親フランスのパウロ四世が即位していた。ファルネーゼ家は親スペイン的姿勢に転換した。しかし，フェリペは同家の忠誠を確実に担保するために，ピアチェンツァにスペイン兵を駐屯させ，ファルネーゼ家の唯一の後継で十歳のアレッサンドロを人質としてスペイン宮廷に預けさせるという条件を課した[23]。

第二章：スペイン帝国内の低地諸国

1．マルガリータ・デ・パルマ総督

男系の後継の不在と婚姻関係を通じて，ハプスブルク家は，マキシミリアン一世が低地諸国を獲得した上，その子フィリップとスペインのフアナ女王との結婚でスペインをも獲得した。こうして，二人から生まれたカルロス一世が，ハプスブルク朝スペイン国王となった。彼は，幼少から育っ

---

(21) *Ibid*., pp. 53-54.
(22) *Ibid*., p. 54.
(23) *Ibid*., P. 55.

た国である低地諸国に愛着を持ち，同地の習慣を尊重していたが，その皇太子フェリペ二世の即位で同地のスペイン化が進行する。

フェリペ二世がスペインに去ると，低地諸国は，母親が現地出身である異母妹のマルガリータ・デ・パルマとグランヴェル枢機卿に委ねられた。クロワ家出身のアールスホット公が重用され，オラニェ公，エグモント公，ホールン公らと競合した[24]。カルロス一世の時と異なり，同地ではスペイン化が進められた。教区の数が増え，大司教区がカンブレー，ユトレヒト，メヘレンの三つに再編された。さらに異端審問所と禁書目録が導入された。

マルガリータの息子アレッサンドロ・ファルネーゼがポルトガル皇女と結婚式を行なった頃，スペイン化に対抗する貴族連が宗派を問わず集合し，同盟が結成された。1566年４月彼らが総督に会見した際，総督の相談役ベレルモンが貴族らを“海乞食”と呼び，さらにマルガリータが異端迫害を一時停止した決定を下した際，ブレーデローデが“海乞食万歳”と凱歌を上げた[25]。これで“海乞食”の表現が有名になった。

だが，低地諸国を騒然とさせたのは，経済状況の悪化である。1563年北方戦争が起こり，バルト海貿易が途絶し，食料不足が危機化したことによる[26]。ここから，66年都市部でカルヴァン派による偶像破壊運動が生じた。カルヴァン派の過激化に人々は恐怖感を抱いたので総督側はその伸張を抑えこんだ。しかし，スペインはさらに強硬政策を採った。

２．アルバ公の低地諸国派遣

アルバ公は1567年８月，イタリアを出発しアルプスを越えてジュネーヴ附近を通過し，ライン地溝帯を通り低地諸国入りした。教皇ピウス五世が彼を異端十字軍として期待したのとは逆に，公は，近隣諸国を刺激しないよう，この遠征を反乱潰滅に限定した[27]。早速各種の策を実施し，先ず，

---

(24) Elliott, *op.cit.*, p. 129.
(25) *Ibid.*, p. 136.
(26) *Ibid.*, p. 137.

悪名高い騒擾評議会を設置して反乱分子を捕え裁いた。穏健派のエグモントやホールンが処刑されている。この結果，オラニェ公を含め亡命者が増加した。さらに中央集権化を進め，税制にも手を付けてスペインからの交付金に依存せず同地駐留軍の財政を賄おうとした。かくて不動産に１％，不動産取引に５％，スペインのアルカバラ制に似せて商品取引に10％を課税した[28]。悪評だったのが，この最後の商品取引税だった。ある程度の成功を収めた上で，グランヴェル枢機卿とエボリ派はアルバ公を更迭した。

３．レケセンスの低地諸国派遣

低地諸国の解決を強硬手段に訴えたアルバ公に交代したのがレケセンスだった。連邦制的解決を唱えるエボリ派の期待を一身に集めていた。1573年11月ブリュッセルに入城した。早速，叛徒に対する恩赦を出し，騒擾評議会ならびに十分の一税の廃止を宣言した[29]。だが，信仰の面では譲歩しなかった。カルヴァン派は少数派ゆえアルバ公の専制的姿勢を改めて重税感を除けば，問題は解決すると思い込んだためだ。1574年ライン河口のミッデルビュルフが叛徒側の手に落ち，海上からの連絡を断たれた。陸戦での勝利がこれを相殺したのも束の間，給金の未払いに立腹した兵士らが反乱してアントウェルペンに攻め入り，人質をとり身代金を要求した。おまけにライデン市は，包囲に耐えてスペイン軍を撃退した。こうした中で一挙に反スペインの雰囲気が盛り上がった。

神聖ローマ皇帝マキシミリアン二世の仲介で，75年２月ブレダ市でレケセンスとホラント・ゼーラント両州代表との会議が開催され，スペインは叛徒側に次の提案を行なった。スペインの兵士・役人は撤収すること，低地諸国における唯一の宗教はカトリックとし，プロテスタント信徒は十年以内に同地を去ることを挙げたが，数ヶ月で交渉は決裂した[30]。カルヴァ

---

(27) *Ibid*., p. 165.
(28) *Ibid*., p. 169.
(29) *Ibid*., p. 256.

ン派が要職を占める両州だけでなく，カトリックが優勢な南部諸州でも否決されたためだ。こうして，レケセンスは再び軍事攻勢に出たが，同年９月フェリペ二世による支払停止宣言が災いして攻勢が不可能になった。混乱の中，レケセンスは76年３月に死亡した。

４．ドン・フアン・デ・アウストリアの低地諸国派遣

権力の空白が生ずる中，大きな流れの変化が生じた。先ず，叛徒側の権力構成が変化した。76年９月，オラニェ公は，国務評議会に残るスペイン派を逮捕して新たに全国会議を再編し，北部・南部を問わず十七州を召集してスペインに対抗した[31]。さらに，スペイン傭兵隊によるアントウェルペン劫掠が反スペイン感情を一挙に高めた。給料の遅配でスペイン傭兵隊は各地で掠奪に走り，アロストに駐留していた1200名はアントウェルペンに向かってサンチョ・ダビラ率いる200名と11月４日合流して，同地で11日間掠奪と殺戮の限りを尽くし，その結果，７千人以上の市民と兵士が殺された事件である[32]。所謂“スペインの怒り”である。宗派の異なる北部と南部の諸代表がついにヘントに集まり「ヘントの和約」を締結した。それによると，スペイン軍は撤退すること，フェリペ二世による異端根絶の勅令は停止されること，他の地域のカトリック信仰を妨げない限り，カルヴァン派もホラント・セーラント両州で信仰の自由を持てること等を合意した[33]。

アントウェルペンの劫掠直後に総督として低地諸国に赴任したドン・フアンは，翌77年２月，上記の和約に基づく「永代令」を諸州との間で締結した。ただしこの中には，カトリック信仰があらゆる州で復活されるべき，と言う条項があったので，ホラント・ゼーラント両州は強く抗議し，彼を

---

(30) *Ibid.*, p. 259.
(31) *Ibid.*, pp. 261-262.
(32) Losada, *op.cit.*, pp. 75-76.
(33) Elliot, *op.cit.*, p. 262.

総督として認めないと主張した[34]。のちドン・フアンは，それまでの和平政策を破り，突如７月にナミュール市を占領した。かくて，オラニェ公側も12月の全国会議でドン・フアンへの誓約を撤回し，神聖ローマ皇帝マキシミリアン二世の三男マティアス大公を総督と宣言した[35]。翌78年１月には，ドン・フアンはジャンブルの戦いで勝利を収めたが，10月にチフスで急死する。享年33だった。

第三章：アレッサンドロ・ファルネーゼと低地諸国

１．未成年時のアレッサンドロ

母マルガリータ・デ・パルマはネーデルラント総督に就任する一方，息子アレッサンドロはイタリア諸侯の人質としてスペイン宮廷に遣られることになるのがこの時期である。母子はともにパルマを出立し，当時ブリュッセルに宮廷を置いたスペイン王フェリペ二世の元に参上した。アレッサンドロは，皇太子ドン・カルロスの小姓に任命されるや，フェリペ二世に同行して渡英した。対フランス戦を有利に運べるよう，フェリペが英国女王で自らの皇后であるメアリー・チューダーに会う一方，英国の中立を要請する旅でもあった[36]。背後を固めたフェリペは，低地諸国から出兵してフランスと交戦し，サン・カンタンやグラヴリーヌで大勝利を収め，1559年カトー・カンブレジー条約を締結した。これを機に王はスペインに宮廷を移し，アレッサンドロも従った。他方，低地諸国の統治は，彼の母で王の異母妹マルガリータ・デ・パルマに委ねられた。

アレッサンドロは，当時スペインの都であったバリャドリードに赴いた。そこで，ほぼ同年代であった叔父のドン・フアン・デ・アウストリア，皇太子のドン・カルロスと親しくなった。のち，皇太子の転地療養を兼ねて，三人は温和なアルカラ・デ・エナーレスに移った。ドン・フアンとアレッ

---

(34) *Ibid*., p. 263.
(35) *Ibid*., p. 274.
(36) Losada, *op.cit*., p. 56.

サンドロはともに武人的性格が共通しており，緊密さを増したが，皇太子は体力精神ともに能力が劣っていた。ある時，皇太子は下人の娘を追い掛け回し，階段から落ちて瀕死の重傷を負った。その治療には，先王カルロス１世の典医ヴェサリウスはおろか，エル・プンテレテと呼ぶバレンシア出身でモリスコの民間医療者までが動員された。おまけに，アトーチャの聖母像までもが贈られた上，奇蹟で評判のあった故ディエゴ・デ・アルカラの遺物まで掘り起こしてドン・カルロスに触れさせた。甲斐あってか，ドン・カルロスは傷が癒えたが精神疾患は悪化した[37]。後年，低地諸国の反乱者と組んで父王に反抗した罪状で幽閉され，1568年23歳で不可解な死を遂げた。

２．成年に達したアレッサンドロ

さて，アレッサンドロは1562年16歳になり，結婚適齢期を迎えた。イタリアの有力諸侯との縁組はフェリペに拒絶され，次いでポルトガル王マノエル一世の孫マリア・デ・ポルトガルと縁組した。式の行なわれるブリュッセルまでエグモント伯に同行された。ポルトガルから来た花嫁をアルムイデン港で迎え，1565年11月11日婚礼を行なった[38]。その後，ファルネーゼ夫妻は揃ってパルマに帰還した。アレッサンドロは結婚生活に安住できず脾肉の嘆をかこった。低地諸国で軍事展開するアルバ公軍にも叔父ドン・フアンによるモリスコの反乱鎮圧（1568年）にも参戦できなかった。

叔父と再会して共同で軍事作戦を行なったのが，レパント沖海戦である。占領されたキプロス島をオスマントルコから奪還すべく，ヴェネツィアが教皇庁やスペインと神聖同盟を組んだ。結局，ドン・フアン提督下の艦隊が，1571年ジェノヴァを出港し，ナポリで教皇軍と，シチリア島のメッシナでヴェネツィア軍と合流した。こうして300隻の艦船と8000人の兵員に膨れ上がった[39]。９月16日メッシナを出港し，ヴェネツィア領のコルフ島

---

(37) *Ibid.*, pp. 58-59.

(38) *Ibid.*, pp. 59-60.

に向かい，トルコ艦隊がコリント湾の中，レパント沖合に停泊している情報を得た。10月７日，両陣営の火蓋が切って落とされ，オスマン艦隊が敗北した。旗艦が捕獲されて指揮者が血祭りに上げられたことや，右列と中央列の艦隊が崩れたことで，300隻からなるトルコ艦隊のうち，117隻が捕獲され，３万人のトルコ兵が死亡したように損害が甚大であったためだ。神聖同盟側は15から20隻の艦船を失い，8000人の死亡，15000の怪我人を出した[40]。

同盟側は翌年再びトルコと海戦を交えた。神聖同盟を提唱してきた教皇ピウス五世が死去し，グレゴリウス十三世が後を継ぎ，ドン・フアンが引き続き指揮を取った。だが今回は同陣営の足並みが乱れた。スペインとヴェネツィアの猜疑心がより増したこと。スペイン王がドン・フアンの行動に猜疑心を抱き，艦隊の出発を遅らせたことが原因だった[41]。教皇庁の圧力で漸くフェリペは1572年７月ドン・フアンにメッシナ出港を命じた。今回もファルネーゼが参戦した。同盟側は，警戒するトルコ艦隊に相手にされなかったので，上陸して城塞を囲んだ。アレッサンドロも8000の指揮を任されていた[42]。しかし，トルコ側の反撃も素早く，結局撤収する他なかった。この失敗で神聖同盟は全く分解してしまい，ヴェネツィアは73年３月単独で講和を図り，これを知ったドン・フアンも艦隊を引き揚げた。

３．低地諸国に向かったファルネーゼ

ドン・フアン・デ・アウストリアを継いだのがアレッサンドロ・ファルネーゼだった。アルバ公の武断政治が流産し，レケセンス，ドン・フアンによる宥和政策も失敗したから，アレッサンドロは強硬手段と調略を巧みに使い分ける綱捌きを行なった。しかも，気前が良い上に借金の返済には

---

(39) Elliott, *op.cit.*, p. 152.
(40) *Ibid.*, pp. 192-193.
(41) *Loc.cit.*
(42) *Loc.cit.*

極めて正確だったから，商人から新規の融資を受けられる信用を得た。従って，フェリペ二世からの援助が絶えても資金を調達できた。

フェリペ二世は，低地諸国の統治をアレッサンドロと，その母親で元総督のマルガリータと共同で当らせようとした。軍事は前者に，民事は後者に委ねようとした。マルガリータにしても老齢だったが，イタリアのピアチェンツァを譲ると言われたので重い腰を上げた模様だ。しかし，アレッサンドロは権力の分散に強く反対し，母親が1583年イタリアに帰国したので，全権を掌握できた。

４．アラス同盟

ファルネーゼが低地諸国入りした時，スペイン王に忠誠を誓っていたのはルクセンブルクのみで，他の諸州はオラニェ公ヴィレム側に組していた。強固に見える低地諸州も，実は異宗派間の不和が激しかったから，ファルネーゼは先ず南部のカトリック諸州を切り崩し，しかるのちに北部へ侵攻する作戦を立てた。

カトリック諸侯が治める南部諸州は，カルヴァン派の伸張に恐怖を抱いていた。モンティニーらは，カルヴァン派の拠点ヘントを攻める一方，諸州との間で1579年１月アラス同盟（オランダ語でアトレヒト同盟）を結んだ。ファルネーゼは，同盟をスペイン側に引き込むため，ドン・フアン時に決定した「ヘントの和約」や「永代令」を追認する動きに出た。同年５月，両者間でアラス条約が結ばれ，フェリペ二世からも承認を受けた。合意事項は次の通りである。スペイン軍は６ヶ月以内に撤退すべきこと。その復帰は住民からの要請がない限り行なわれないこと。その代わり，南部諸州の人員を採用した現地軍を組織すること。公職にある者はすべてカトリック擁護を宣誓すること。政治はカルロス一世時代のそれに戻すこと。総督は王族の血筋を引く王子であること。最後に，フェリペ二世の子供の一人は南部諸州で育てられ，総督死去の暁には総督になってもらうこと等がある[43]。

しかし，ファルネーゼに悩みは続いた。一つは，上述した協約を反故にしかねないとアラス同盟側から猜疑の目でみられていたこと。もう一つは，南部諸州のカトリック軍が余りに弱体だった上，協約に阻まれてスペイン軍の導入が不可能であったことだ[44]。さらに，1580年夏，“不満派”の一人，ギヨーム・ドゥ・ホールンがアランソン公と共謀していることが露見した。ファルネーゼは，すぐに彼を逮捕し処刑したが，アルバ公の二の轍を踏まぬよう，所領を没収することだけは控えた[45]。他の貴族に対しても懐柔に努めた。

1582年トゥルネー市を征服するとすぐ，彼はここにアラス同盟の代表を召集した。代表に対し，同市の征服には南部諸州軍単独では無理で，撤収が終わっていなかった傭兵部隊の成果であることを強調し，スペイン軍の復帰を納得させた。こうして年末には，彼は６万の兵士を抱えることが出来た。その中にはスペイン人とイタリア人傭兵をそれぞれ５千，４千を含んでいた[46]。こうして軍隊の強化を図ったのである。

５．アランソンの野望

1580年７月，フェリペ二世はヴィレムを反逆者としその首に懸賞金をかけた。同年12月，ヴィレムは『アポロギア』を全国会議に提出し，フェリペ二世を暴君と非難してスペインからの独立を闡明にした[47]。これによりヴィレムは日和見主義者の嫌疑が晴れ，祖国の父となるのだが，独立の確保には外国を後ろ盾にする必要があった。英国に拒否されると，フランスからアランソン公を総督として推戴することにし，1580年９月全国会議に提案し認められた。新総督は旧教徒ゆえスペイン支配下の南部諸州を引き込み易かったと言える。

---

(43) Losada, *op.cit.*, pp. 118-119.
(44) Elliott, *op.cit.*, p. 288.
(45) *Loc.cit.*
(46) Losada, *op.cit.*, pp. 137-138.
(47) Elliott, *op.cit.*, p. 290.

アランソンは，ヴィレムの要請に基づき，軍を率いて低地諸国南部に侵入した。1581年夏，カンブレーを占領するが，そこまでだった。フランス王アンリ三世とその皇后カトリーヌ・ドゥ・メディチがスペインの侵攻を恐れて兄弟の企図を止めたこと，兵士が給料の遅滞で戦線を離脱したことによる[48]。そこで彼は軍を増強すべく，英国に渡って援助を仰ぎ，あわよくば同国のエリザベス女王と婚姻を結ぼうとすらした。ヴィレムの催促で漸く82年２月英国から帰還し，アントウェルペンに居を定めた。だが，名目上の総督に過ぎないことに不満を抱くようになり，実権を奪取することを考えた。聖アントニオの日に当る83年１月17日，城外に駐屯するフランス兵はアントウェルペン城内になだれ込み，カトリック教徒を蜂起させようとした。しかし，住民は宗派に拘らずフランス軍と戦い，これを追放した。聖バルテルミーにはならなかったが，この蛮行は“フランスの怒り”と呼ばれた[49]。かくてアランソンは，政治的生命を断たれ，夏フランスに帰国して翌年死去した。

オラニェ公は，ユグノーのルイーズ・ドゥ・コリニーと第四回目の結婚を行なった。フランスとの紐帯を失わない配慮だったからだが，人々からは不評を買った。そのため，83年夏アントウェルペンを去り，ミッデルビュルフを経由してデルフトに向かった。しかし，84年11月，スペインの放った刺客バルタサール・ジェラールに暗殺された。

６．アントウェルペン陥落

ファルネーゼは同盟を足がかりにして，南部の諸州をスペイン側に回復し，その最終目標地はアントウェルペンに定めた。彼が最初に手がけた作戦はマーストリヒト市の包囲だった。ここは南部諸州の喉元を扼し，南北を結ぶスペイン道の通過点にあったことから，是非とも確保が必要であった。1579年１月ファルネーゼの軍勢の四分の三に当る29000人を先発させ，

---

(48) Losada, *op.cit.*, pp. 129-130.

(49) *Ibid.*, pp. 139-140.

ファルネーゼ本人は10000人を率いて陽動作戦を行ない，アントウェルペンに向かうそぶりを見せたため，オラニェ公はアントウェルペンを固めるのに急で，マーストリヒトに救援を送れなかった[50]。主将シュヴァルツェンベルク・デ・ヘルレン，ユグノーの副将セバスティアン・タッパンが守る城内は，降伏勧告を拒絶して周囲の門，要塞，城壁を固めた。軍勢には1400人の兵士と近隣の武装農民が4000人いた。スペイン軍は砲撃後，城内に突入しようとしたが損害が大きかった。7月29日，スペイン軍は，城壁の割れ目を発見して城内に突入し，数日間にわたり掠奪を行ない，数千の市民を殺害したとされる。別の伝では18000のうち生存者は数百とも言われる[51]。マース河は朱に染まったのだった。

次に，海岸部の都市ダンケルク，ニューポールトを包囲，占領した。こうして，叛徒に対する諸外国からの援助を断った一方，スペインとの海上線を確保できた[52]。次にイープル，ヘント，ブリュージュ方面へ軍を展開した。83年末になると，それまでポルトガル攻略に投入していたスペイン軍を低地諸国に投入できることになった。イープルは包囲後，城内は飢餓が酷くなり，結局84年4月スペインに降伏した[53]。

ブリュージュも包囲された。城内の指導者シャルル・ドゥ・クロワはプロテスタントだったが，オラニェ派に信を置かなかった上，自らの権力を保持しようとする余り，1584年5月ファルネーゼに降伏した[54]。ファルネーゼは，ヘント市を囲む一方，スヘルト河に要塞を築いて同市へ援軍が来ることを阻止した。同市は，一時追放されていたヤン・ファン・ヘンベイゼが戻ってきており，彼の率いるカルヴァン急進派とオラニェ派との間で権力抗争が交わされていた[55]。ヘンベイゼは政敵を憎む余り，スペインと交渉

---

(50) *Ibid.*, p. 113.
(51) *Ibid.*, pp. 115-116.
(52) *Ibid.*, pp. 141-142.
(53) *Ibid.*, pp. 143-144.
(54) *Ibid.*, p. 146.
(55) *Ibid.*, p. 145.

を通じたため，オラニェ派に逮捕された。とはいえ，以後もスペイン側に通ずる動きが進み，84年９月に降伏した。その条件は，カトリック教会の修復，賠償金を払うこと，カルヴァン派は二年以内に同市を去ることだった[56]。

そうしてメヘレン，ネイメーヘン，ブリュッセルなどに攻めた後，いよいよ主目標のアントウェルペンに向かった。同市は15万人の市民を抱え，とくにアルバ公時代に整備を重点化し，頑丈な城壁に加え，五角形の先端をなす10の保塁があった。しかもスヘルト川があり，城内を堀が囲んでいた。しかも，堤防を決壊すれば周囲を水浸しにでき，小船を使えば河口からの援助を仰げた[57]。城内の総督フィリップ・マルニクスは，ヴィレムの命令を受けて堤防を決壊しようとした。しかし，住民からは，広大な草地が使えなくなり，家畜が餓死する可能性があるとして，総督の措置に強硬に反対した[58]。

ファルネーゼは1584年夏，同市の包囲を開始した。12000人の兵士をここに集中し，その他の軍勢は同市に補給をする諸都市の攻撃に振り向けた。彼は，先ずスヘルト河上流の橋梁を確保し，敵側の船舶の航行を断つ一方，両岸の要塞を占領していった。そうして，河口近くの両岸に，所謂“ファルネーゼ橋”を架け，両岸にサン・フェリペ，サンタ・マリア要塞を作り，海上からの攻撃に対処しようとした[59]。しかし，問題は架橋そのものだった。川幅は500メートル以上，中央部の水深が30メートルあるように深く，しかも流速が速かったため，中央部に橋桁を打ち込むことが出来なかった。そこで，両側から通常の橋を建設するとともに，中央部は調達した船を連ねてしっかりと鎖で結び付け，その上に橋桁を渡して，いわば浮き橋を作ることで懸案を解決した[60]。船舶，木材は周辺の降伏した都市から調達し

---

(56) *Ibid.*, p. 152.
(57) *Ibid.*, pp. 161-162.
(58) *Loc.cit.*
(59) *Ibid.*, p. 151.
(60) *Ibid.*, pp. 151-152.

たが，さすがに大工は払底していたので，イタリアや北欧諸国から招いた。城内からは，ジャンベリの発意で爆薬を積んだ船を流して橋を爆破しようとしたが，ファルネーゼ側も修理を急いだ[61]。

スヘルト河口から艦隊を編成してやって来た叛徒軍は，歩兵を上陸させて周囲の堤防を壊してスペイン兵を溺死させようとした。しかし，潮が予想以上に早く退いたので，艦船が座礁し，スペイン側も反撃し，多くの敵兵を殺害した。ファルネーゼは，拿捕した艦船を城内の攻撃に使う一方，堤防の修理に敵兵の死体をも積み上げたと言う[62]。こうして飢餓が進行したアントワープは1585年８月17日に降伏した。これを聞いたフェリペ二世は感極まり，娘のイサベルの部屋に駆けつけ，「アントワープが我々のものになった」と心中を吐露した[63]。かくて，ファルネーゼは過去三十年間切望していたピアチェンツァ要塞を褒賞として授かった。アメリカ産の銀を決済場は1534年フランシュコンテ地方のブザンソンに始まり，1579年ピアチェンツァに移されたように，同地は金融の中心の一つだった[64]。

第四章：アレッサンドロ・ファルネーゼとフランス侵攻

１．英国戦

オランダの息の根を止めるには，英国を叩くことは必要だった。フェリペ二世は，海戦に不慣れなメディナ･シドニアに命じて大艦隊をスペインから派遣する一方，ファルネーゼに対しても，低地諸国で船舶を集め大艦隊に合流するよう命じた。しかし，大洋を航海できる大きな船舶は叛徒側の手にあり，自分の周囲には小艦船しかないこと。大洋に出るライン河口を同様に叛徒側が掌握していることを挙げ，結局一部の艦船を派遣できたに過ぎない[65]。1588年スペイン艦隊が敗北すると，その責任がメディナ･

(61) *Ibid*., pp. 156-158.
(62) *Ibid*., pp. 159-161.
(63) *Ibid*., p. 163.
(64) Elliott, *op.cit*., p. 269.
(65) Losada, *op.cit*., pp. 192-193.

シドニアだけでなく，ファルネーゼに負わされることになる。終生付きまとう不名誉とされた。その汚名を濯ぐ意味からもフランス出兵を結局否定できなかったのかもしれない。

2．対フランス第一次出兵

フランスでは，男系の後継がいないアンリ三世の後継者を巡って抗争が生じていた。一人の候補はユグノーのアンリ・ドゥ・ナヴァールだった。一方，アンリ・ギーズ公率いるカトリック側は，高齢のブルボン枢機卿を暫時据えてアンリ・ドゥ・ロレーヌに譲る計画を持っていた。ギーズ公の人気を苦々しく思ったアンリ三世は，公と枢機卿を欺して殺害した。こうしてスペインはフランス介入の口実を得たし，パリの住民，教会ともに王をヘロデ呼ばわりして拒絶した。やがてアンリ・ドゥ・ナヴァールが駆けつけ，パリを包囲して旧教徒の蜂起を断とうとした。この中で国王アンリ三世が旧教徒に殺される。

フェリペ二世は，ファルネーゼにフランス侵攻を命じた。ところで，当時スペイン宮廷ではフランス戦に対し二つの考えが対立した。フアン・デ・イディアケスは，スペインが投入できる資源には限りがあるのだから両面作戦は回避すべきで，まずは低地諸国戦に集中してフランス戦は後回しにすべきである，しかも，フランスは内戦状態ゆえ介入しなくても自滅する，と主張した[66]。これに対し，対フランス強硬策を採ったクリストバル・デ・モウラは，スペインが旧教側に梃入れしてアンリ・ドゥ・ナヴァールの即位を阻めば，フランスを旧教国家にでき，低地諸国の叛徒は後ろ盾を失って自滅する，と主張した[67]。フェリペ二世もローマ教皇シクストゥス五世も後者の姿勢を支持した。

ファルネーゼは，イディアケスに支持したがフェリペの命令に従った。当初1590年アルバ公に処刑されたあのエグモントの息子，フィリップ・ド

---

(66) Elliott, *op.cit.*, p. 339.

(67) *Loc.cit.*

ゥ・エグモントに出陣を命じたが，イヴリーの戦いで戦死したので，ファルネーゼは直々に出陣し，低地諸国をマンスフェルト公に委ねた[68]。彼は，ギーズ公の兄弟マイエンヌ公と合流し，アンリとの戦いを避けつつ，マルヌに架橋して対岸に渡り，パリの包囲を解いて城内に入った。包囲を解く目的を達したが，城内と同じく彼自身の軍隊も食料が底を尽いたこと，スペインに対するフランス人の悪感情の強さを見たことで撤退を開始した。アンリの攻撃を撃退し低地諸国に戻った。

3．対フランス第二次出兵

フェリペ二世はフランス侵攻を決定した。娘のイサベルをフランス王に就けたい一心からだった。ファルネーゼは，低地諸国北部の情勢も自らの健康にも不安を抱えつつフランスへ向かった。1592年，セーヌ河口にある都市ルーアンの包囲を解くためだった。ここでアンリ四世と対峙した。敵を一挙に壊滅できるチャンスだと思ったが，フランスのカトリック側の領袖マイエンヌが準備不足を理由に積極策に出ようとしなかったので，やむを得ずそれに従った。何よりも，イサベルの結婚相手がこのマイエンヌであることを配慮したからだった[69]。だが，ルーアン近くのコーデック城を攻めた際，敵の弾丸で重傷を負ったため息子ラヌッチオに指揮を任せた。

4．対フランス第三次出兵の頓挫とファルネーゼの死

第三次のフランス出兵が行なわれようとしたが，フェリペ二世は甥を作戦から外すことにした。1592年２月のことだ。本国からの訓令が届かないまま，同年11月，ファルネーゼはブリュッセルを立ち，ハルに参ったのちフランス国境に赴いた。アラスに達すると聖ファアスト修道院に宿泊したが12月２日の夜中，死去した。享年47だった。スペイン召還を伝えるフエンテス侯がファルネーゼの死を知ったのは，アラスに赴く途上だった。

---

(68) Losada, *op.cit.*, p. 215.
(69) *Ibid.*, p. 227.

死んだファルネーゼは，カプチン会の法衣を着せられ，金羊毛勲章が付けられた。そのあと，聖ファアスト修道院に移されて防腐処置が施される。続いてブリュッセルを経て故郷のパルマに送還され，ステッカータ聖母教会の地下礼拝堂に埋葬された[70]。フェリペ二世は，ファルネーゼに猜疑心を持っていたので，関係書類を押収して，それらをすべて本国に送還し終わるまで故人の秘書コジモ・マシに現地待機するよう命じた。罪状を見つけ機密を封ずるためだったようだ[71]。

ファルネーゼの息子ラヌッチオは，父親の汚名を濯ぎ，自分がフランドル総督職になるために1621年まで精力的に動いた。さまざまな歴史家に働きかけて，対英戦不参加への非難を消してそれ以外の英雄的行為を顕彰して貰おうとした[72]。ピアチェンツァ市のカヴァッリ広場には，アレッサンドロ，ラヌッチオ親子の青銅製騎馬像が鎮座している。共にフランチェスコ・モッキが1612から29年にかけて製作した作品だ。

5．ファルネーゼ以後の対フランス戦

ファルネーゼの死後，フランスとの戦いは，フェリペ二世の娘をフランス女王にしようとする無駄な努力だった。1593年１月開催されたフランスの三部会では，イサベル・クララ・エウヘニアをフランス女王に，ギーズ一族のマイエンヌ公を国王にとスペイン大使が推挙したが，男系相続を唱えるサリカ法典を盾に，反スペイン感情も手伝って大勢はその提案に難色を示した[73]。やがて，アンリ四世は，新教皇クレメンス八世から赦免を受けて，93年７月25日カルヴァン派を止めてカトリックに改宗した。さらに，カトリックの領袖マイエンヌとも96年１月に和解した[74]。こうしてスペインは戦いの大義を失ったのである。

---

(70) *Ibid.*, p. 230.
(71) *Ibid.*, p. 231.
(72) *Ibid.*, pp. 231-232.
(73) *Ibid.*, p. 232.
(74) Elliott, *op.cit.*, p. 357.

95年１月，アンリ四世はスペインに対し宣戦を布告した。フェリペが支援するカトリック同盟も瓦解しており，戦争はブルターニュ，ブルゴーニュ，プロヴァンスの様なフランスとの国境沿いで散発的に展開した。

スペイン領低地諸国では，ファルネーゼの死後，神聖ローマ皇帝ルドルフ二世の弟エルネスト大公を総督にし，イサベルと娶わせることにしたが，就任後の95年すぐに死去した。フエンテス伯が臨時総督を務めた後，ポルトガル副王のハプスブルク家アルベルト大公に交代した。アルベルトは96年春，港湾都市カレーを占領した。同じ頃，アイルランドで反乱が起こり，その指導者はスペインに援助を求め，無敵艦隊来航さえ希望した。英のドレークやホーキンズはカリブ海域攻撃をやむを得ず中断した[75]。

だが，スペイン政府も同年11月，第三回目の破産宣言を行なった。スペインはもちろん，フランスも重なる借財の重圧に悩まされ，両国は休戦に向かい，98年５月ヴェルヴァン休戦条約が締結された。この時，スペインはカレーやブルターニュなどの占領地を返還した。ただし，英国ならびに低地諸国北部諸州との戦いは続く。前者とは1604年に，後者とは1609年，所謂“12年間の休戦”を結ぶに至る。

終章：結びに代えて

アレッサンドロ・ファルネーゼは，南部低地諸国をスペインに回復した。その理由には，浮き橋の建設にみるよう，新しい建築技術を採用･応用したこと，借入･返済に正確だったため，本国からの遅れがちな資金融通を当てにせず資金調達ができたこと等，いわば兵站を重視したことが大きい。だが，それにまして重要だったのが，現地の宗教的特性を的確に把握した面が大きいだろう。常に宗教的寛容が底流としてあることを把捉していた。従って，17世紀スペインの経世家にサンチョ・デ・モンカダらアルビトリスタを考究する際に今度はファルネーゼの経験が生きて来るはずである。

---

(75) *Ibid.*, p. 230.